速報展「発掘された鈴鹿 2015」　　平成 28 年 6 月 12 日（日）
第 2 回スライド説明会　　鈴鹿市考古博物館

「間瀬口遺跡・磐城山遺跡第 7-2・８次」

間瀬口遺跡

所 在 地	鈴鹿市木田町字間瀬口
事業主体	鈴鹿聖十字会
調査目的	福祉施設増築
調査期間	平成 27 年 2 月 1 日～ 5 月 26 日
調査面積	約 650 ㎡
調査主体	鈴鹿市　文化振興部　考古博物館
調査担当	田部剛士・太田有香

磐城山遺跡

所 在 地	鈴鹿市木田町字西條
事業主体	個人
調査目的	農地改良工事
調査期間	7-2 次；平成 27 年 2 月 6 日～ 3 月 18 日 8 次；平成 27 年 6 月 2 日～ 11 月 5 日
調査面積	約 580 ㎡
調査主体	鈴鹿市　文化振興部　考古博物館
調査担当	田部剛士・太田有香

１　位置と環境

1）地理的環境

鈴鹿市の北部には，鈴鹿川が東流し伊勢湾に注ぎ出ている。鈴鹿川の流域には河川による沖積地が広がっているが，左岸には内部川と御幣川によって形成された扇状地が台地状に広がっている。間瀬口遺跡は，この台地の間を流れる波瀬川の左岸に形成された低い段丘上に位置する。標高は 20 m程度であり，すぐ北側に隣接する伊勢国分寺跡周辺とは，比高差 20 mもある。一方，磐城山遺跡は台地の南端部に位置し，標高は 37 m前後である。鈴鹿川に向かって舌状に張り出した台地上にあり，生活を営むには絶好の位置である。

2）歴史的環境

間瀬口遺跡の周囲の低位段丘上には遺跡が少ないが，磐城山遺跡がある台地上には多くの遺跡が存在する（図 1）。高岡台から石薬師町にかけては，青谷遺跡や境谷遺跡，中尾山遺跡，沖ノ坂遺跡，磐城山遺跡，一反通遺跡等，弥生時代の遺跡が多数存在する。また，伊勢国第 4 位の規模を誇る寺田山 1 号墳をはじめ，富士山古墳群や石薬師古墳群等，古墳も多く築造されている。

さらに，間瀬口遺跡の直ぐ北側の台地上には，伊勢国分二寺跡や河曲郡衙跡と目される狐塚遺跡，古代寺院と想定される南浦遺跡（通称，大鹿廃寺跡）等が確認されており，古代に栄えた地域の一つである。なお，やや時期は下るものの，古代末期頃には国分東遺跡で道路状遺構も確認されており，長く重要な地であったようである。

中世前半の遺跡は希薄だが，後半以降になると現在の国分町の集落内に比定されている国分遺跡や国分北遺跡等で活動の痕跡が確認されている。また，高岡城跡や木田城跡といった山城も各地に築かれており，戦国期に至るまで延々と利用されていたようである。

ところで，この河曲地区は日本最大の内乱である壬申の乱に登場する，「川曲の坂下」の候補地の一つである。『日本書紀』によると，672 年 6 月 24 日に吉野を発った大海人皇子（後の天武天皇）は，翌 25 日には名張，伊賀を抜けて鈴鹿へ入り，川曲の坂下に至って日が暮れたという。強行軍であったため，この川曲の坂下で鸕野讃良（後の持統天皇）と共に休んでいると，雷雨になりそうであったため，三重郡衙まで移動したと記録されている（資料一）。この「川曲の坂下」が，実際にどこなのかは不明であるが，間瀬口遺跡のある木田町周辺である可能性も考えられ，今回の発掘調査で何らかの手がかりが見つかる可能性も考えられた。

また，古代伊勢国には「大鹿」氏が存在したことが知られている（資料二）。大鹿氏の本貫地は多気町の相可とする説もあるが，『延喜式』の河曲郡に「大鹿三宅神社」がみえることや『大神宮諸雑記』に「河曲神戸預大鹿武則」の名があること，『皇大神宮建久已下古文書』の山辺御薗に「当御薗内大鹿村、号国分寺領」とあること等から，国分町周辺の説が有力とされる。また，大鹿氏は首姓を名乗っている。首姓は，大和朝廷の地方における直轄地（屯倉）の管理者に多いといい，大鹿氏は屯倉の管理をしていた氏族かもしれない。

1 宮ノ前遺跡　2 河田宮ノ北遺跡　3 八重垣神社遺跡　4 十宮古里遺跡　5 萱町遺跡　6 須賀遺跡　7 龍光寺遺跡　8 神戸城跡
9 本多町遺跡　10 狐穴遺跡　11 野辺遺跡　12 竹野遺跡　13 竹野一丁目遺跡　14 三日市東遺跡　15 南山遺跡　16 口山遺跡
17 添遺跡　18 山辺東遺跡　19 山辺瓦窯跡　20 間瀬口遺跡　21 狐塚遺跡（推定河曲郡衙跡）　22 伊勢国分寺跡　23 国分西遺跡
24 国分寺北遺跡　25 国分北遺跡　26 国分遺跡　27 国分南遺跡　28 南浦遺跡　29 木田坂上遺跡　30 木田城跡　31 磐城山遺跡
32 沖ノ坂遺跡　33 中尾山遺跡　34 国分東遺跡　35 富士山越遺跡　36 境谷遺跡　37 寺山遺跡　38 扇広遺跡　39 西ノ岡Ａ遺跡
40 西ノ岡Ｂ遺跡　41 東ノ岡遺跡　42 青谷遺跡　43 高岡城跡
ａ 大鹿山１号墳　ｂ 富士山１号墳　ｃ 富士山 10 号墳　ｄ 寺田山１号墳　ｅ 高岡山２号墳　ｆ 高岡山９号墳

図１　遺跡の位置（S=1/20,000）

資料一
『日本書紀』巻第廿八　天武天皇元年（672）六月
「到川曲坂下、而日暮也。以皇后疲之暫留輿而息、然夜曀欲雨、不得淹息而進行。於是、寒之雷雨已甚、従駕者衣裳濕、以不堪寒。乃到三重郡家、焚屋一間而令温寒者。」

資料二
『日本書紀』巻第廿　敏達天皇四年（575）春正月
「次采女伊勢大鹿首小熊女曰菟名子夫人、生太姫皇女更名、櫻井皇女與糠手姫皇女更名、田村皇女。」

2　間瀬口遺跡の成果

1）検出遺構

a）竪穴住居

可能性のあるものを含めて，7 棟を確認した（図 2）。主に調査区の南東側で検出している。いずれも床面付近まで削平されており，遺存状態はよくなかった。

SH0106　　南北 3.2 m程度，東西規模は調査区外であるため不明であるが，1.3 m以上はある。検出面から 0.35 mの深さがあり，埋土は上部から黒色シルト層，黒色シルトに黄褐色ブロックが多く混じる層の 2 層で構成されている。なお，西側に別の遺構 SX0107 として調査したものが，焼土塊を若干含むことから，この SH0106 のカマドの痕跡である可能性もあるが，明確に捉えることができなかった。そもそも別遺構で，SH0106 自体も土坑である可能性がある。

出土遺物は土師器の甕，須恵器の破片等が出土しており，古墳時代頃の遺構だと考えられる。

SH0115　　南北は 6.0 m，東西 4.5 m以上の規模を持つ。検出面において既に床面より下位まで削平されており，埋土は全く残っていなかった。周壁溝は北側で削平されているようであるが，他は全周している。また，中央には不整形の土坑状の凹みを持ち，西側には 2 ヶ所主柱穴を有する。火処は確認できなかった。

出土遺物は弥生土器の受口状口縁の甕が出土しているが，全体的に少量であり，帰属時期は特定し難い。

SH0116　　南北 4.4 m程度，東西 3.0 mの規模を持つ。削平が著しく，埋土は残っていない。当初，竪穴住居として調査したが，平面形も不整形であるし，木の根の撹乱が多く不鮮明である。

出土遺物は少なく，帰属時期は不明である。

SH0117　　南北 4.3 m，東西 3.7 m程度の規模を持つ。中央には土坑状の凹みがあるが，主柱穴ははっきりしない。周壁溝が巡るものの，北辺の中央が途切れており，本来はここにカマドがあった可能性が高い。

また，カマドに向かって右側の周壁溝内から，土師器の椀ないし杯が出土しており，6 ～ 7 世紀代の建物であったことが判る。

SH0120　　南北 4.0 m，東西 3.0 mの規模を持つ。床面まで削平されていたものの，中央には貼床が確認され，かつ北辺の中央にはカマドが明瞭に残されていた。内部，外部に明確な主柱穴は認められなかったが，カマドに向かって右脇に貯蔵穴らしき土坑が確認された。

出土遺物はカマド及び右脇の貯蔵穴から多く出土した。土師器の鍋，須恵器の杯 G 身，同高杯等が出土しており，7 世紀後半の建物である。

SH0122　　南北は 3.0 m以上，東西 5.5 m程度の規模を持つが，削平が著しく不明確である。検出面で既に床面よりも下位であり，周壁溝と主柱穴 2 ヶ所程度あることしか確認できなかった。

出土遺物は土師器の S 字状口縁の甕や高杯等が出土しており，古墳時代頃の建物であろうか。

SH0123　　南北 3 m以上，東西 4 m以上の規模を持つようである。中央と思しき位置で，焼土のみ確認したが，カマドの痕跡は確認できなかった。明確な周壁溝がなく，浅い黒色シルト層の埋土が遺存しているのみで，他はほとんど不明である。

出土遺物はほとんどなく，時期不明である。

b）溝

大きく西側調査区から東側調査区へ抜けていく溝が 3 条確認された。なお，SD0101 と SD0102 の両溝は，芯々間で 1.5 ～ 1.8 m程度の間隔を以って平行しており，この間が道路として機能していた可能性が高い。

SD0101/02　西側調査区から東側拡張区へ平行して続く溝である。総延長は 28 m以上ある。検出面からの深さは，いずれも 0.2 m程度である。灰褐色砂礫混シルト層でしまりのやや無い埋土で，所々に拳大の礫を含んでいた。両者は芯々間で 1.5 ～ 1.8 m程度の間隔で平行しており，この間が道路として機能していた可能性が高い。なお，路面自体は削平のため，確認されなかった。

出土遺物には，土師器や須恵器の破片を含んでいるが混在のようで，山茶椀の存在から中世以降の溝であることは間違いない。おそらく，近世頃の道路であった可能性が高い。

SD0108　西側調査区から東側調査区へ抜ける溝で，総延長 16 m以上を確認した。埋土は黒褐色シルトの単層で，0.1 m程度と浅い。

出土遺物は須恵器の平瓶や土師器の破片があり，古代の溝だと考えられる。

c）土坑

調査区内にいくつかの土坑状の凹みがあるものの，多くは木根等による撹乱の跡である。ここでは，遺物を出土し，確実に遺構と判断できた 2 基のみ記述しておく。

SK0109　長軸 1.1 m，短軸 0.6 m程度の楕円形を呈し，検出面からの深さは 0.25 mを測る。埋土は黒色シルト層の単層であるが，土坑の中央には直径 0.2 m前後の自然石 1 個が，人為的に据えられたような状態で確認された。

出土遺物には土師器甕が出土している。明確な時期は特定できないが，概ね古代の土坑であろう。

SK0112　長軸 0.6 m，短軸 0.5 mのやや楕円形を呈し，検出面からの深さは 0.25 mを測る。埋土は黒色シルト層の単層であるが，SK0109 と同様に土坑の中央に直径 0.3 m前後の自然石 1 個が，人為的に据えられたような状態で確認された。

出土遺物は土師器の高杯が，自然石の上部に伏せて合ったものが転落したような状況で出土した。その特徴から，古墳時代前期のものと考えられ，他の遺構とは時期を異にするようである。

d）谷状地形

遺構という括りではないが，調査区の北側において大きな谷状の地形を確認した。西側調査区から東側調査区へまたがっており，かなり規模の大きな谷状地形であった。一部，東側調査区で 0.6 mほどの断ち割り溝を入れて確認を行った。

埋土は上位から，オリーブ黒色礫混層，オリーブ灰色砂混シルト層，オリーブ灰色粘質土となっていく。いずれも水性堆積であり，かつて河道であった可能性も否定できないが，以深の調査を行っていないため，不明である。

なお，谷の堆積した土質及び遺跡の歴史的な環境から木簡等の出土の可能性が考えられたが，木簡はおろか，出土遺物は 1 点もなかった。

2）出土遺物

出土遺物はコンテナケース（55 × 33 × 10 ㎝）に 4 箱分が出土した。主に飛鳥～奈良時代の土師器と須恵器であり，SH0120 のカマドの周囲から多く出土している。SH0117 の周壁溝から出土した土師器杯も，比較的遺存状態の良いものであった。また，一部には SK0112 のように，古墳時代前期まで遡る土師器高杯等も出土した。

3）調査の成果と課題

今回の発掘調査は，調査面積の割りに検出遺構が乏しかった。また，後世の削平も著しく，竪穴住居等の遺構であっても出土遺物はさらに乏しいものであった。

注目すべきは，7 世紀頃を中心とした集落跡の一部が確認された点である。間瀬口遺跡の本格的な発掘調査は今回が初めてことであり，遺跡の中心部は未調査のままである。現在は遺跡の中心と推定される範囲に水田が広がっているが，この水田は 30 年以上前に圃場整備が実施されている。その際に発掘調査された記録はないが，今もなお遺跡が地下に残されている可能性はある。

先述したように，当地は古代「川曲の坂下」の候補地の一つであり，今回みつかった集落跡がちょうどその頃のものであることから，近隣に「川曲の坂下」が眠っている可能性も考えられる。このように，間瀬口遺跡は重要な内容を含む遺跡であるので，今後とも継続した調査が期待される。

図 2　間瀬口遺跡の遺構配置図（S=1/200）

調査前の様子（南西から）

調査完了の様子（南から）

竪穴住居 SH17 検出状況（南東から）

土坑 SK09 遺物出土状況（西から）

竪穴住居 SH22 カマド検出状況（南から）

竪穴住居 SH22 カマド完掘状況（南から）

竪穴住居 SH22 遺物出土状況（東から）

3　磐城山遺跡の成果

1）検出遺構

a）竪穴住居

多数が重複しているため，正確な数は不詳だが34棟以上を確認した（図3）。この内，2棟は古墳時代後期の建物だが，他は弥生時代後期のものである可能性が高い。

竪穴住居の確認は，これまでの調査と同様の内容であるので詳細は割愛する。磐城山遺跡では，のべ200棟以上の竪穴住居跡が確認されており，県内でも一，二を競う遺構密度といえる。

b）掘立柱建物

第8次調査区の注目するべき点として，7棟以上（8-2次調査の結果8棟以上になった）を確認した掘立柱建物の存在がある（図4，表1）。ほぼ同じ場所に繰り返し建て替えており，かなりその場所に固執していた様子が窺える。いずれも総柱の建物であり，倉庫として機能していたことが想定される。多くは3×3間の建物であるが，SB08211のみ2×3間で，SB08125は3×4間になるとも考えられる。

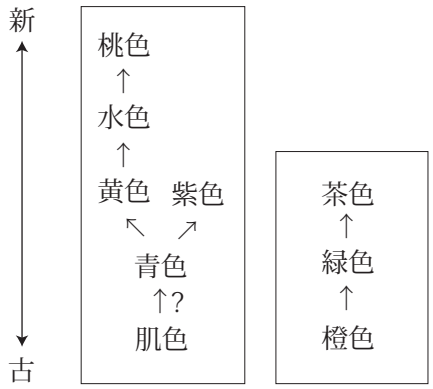
また，これらの建物は重複関係から時期差を確認できる。古いほうから新しい方に①青色→紫色となる。同じように，②青色→黄色/水色，③黄色→水色，④黄色→桃色，⑤橙色→緑色，⑥緑色→茶色，⑦水色→桃色？，⑧肌色→青色？と新しくなる。①～⑥により少なくとも，青色→黄色→水色/桃色と青色→紫色，橙色→緑色→茶色の3点は確認できる。これに不安定ながら⑦・⑧を加味すると，次のように整理される（表2）。この結果，複数棟が同時に存在した点を考慮しても5時期以上が確認され，1棟の存続期間を15年前後と仮定すると，75年もの間継続して倉庫群が建て替えられていることとなる。

なお，建物の年代については定かでない。これは，柱穴しか検出されず埋土が少ないという掘立柱建物の泣き所でもある。実際に出土遺物している遺物は少なく，他の竪穴住居から混在したと思われる弥生土器の破片が出土している程度である。ただし，これらの中に少量ながら古墳時代後期以降の須恵器が出土していることから，少なくとも掘立柱建物が古墳時代後期以降であり，7世紀代に中心があると推定できる。さらに，第7次調査で検出した区画溝SD0777の方位にもよく合致しており，区画内部にある倉庫群と理解できる。

表1　掘立柱建物一覧表

色	遺構番号	規模（間数）	東西（m）	南北（m）	面積（㎡）
茶	SB08127	3×3間	3.9	4.5	17.55
紫	SB08130	3×1間以上	4.5	-	?
桃	SB08128	3×3間	3.8	3.3	12.54
水	SB08129	3×3間	4.2	4.0	16.80
黄	SB0860	3×3間	4.2	3.6	15.12
緑	SB08126	3×3間	4.5	3.9	17.55
青	SB0859	3×3間	4.5	4.2	18.90
橙	SB08125	3×3間	4.6	4.0	18.40
肌	SB08211	2×3間	4.0	4.3	17.20

表2　掘立柱建物の変遷表



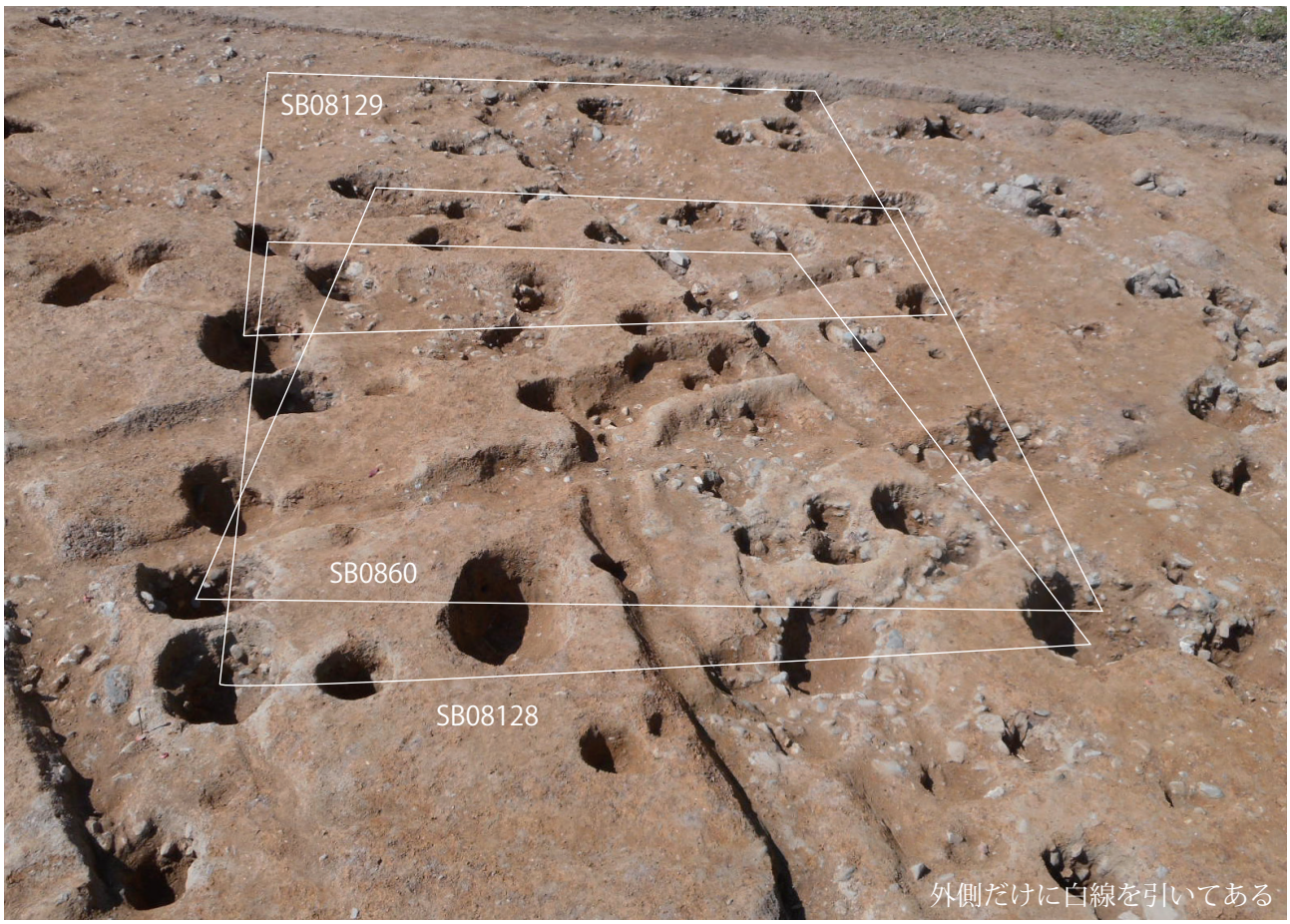
2）出土遺物

出土遺物はコンテナケース（55×33×10㎝）に39箱分が出土した。弥生土器が主体で，一部古墳時代の土師器や須恵器が出土している。出土遺物の大部分は，竪穴住居跡及びそれに付随する溝から出土している。詳細は現在検討中であるが，従来の調査成果と同じ傾向といえる。

3）調査の成果と課題

第8次調査の成果は，何といっても倉庫群の重複が区画溝の方位に沿って確認された点にある。密集して築かれた倉庫の周辺には概期の遺構が乏しく，何らかの意味を持って空間を配置したものと考えられる。倉庫が累々と築かれる様は通常の集落と一線を画すものの，奈良時代にみられるような柱列を揃えて配置する正倉とも異なる。年代的に7世紀代を中心とする可能性が高いことから，今のところ，地方豪族（大鹿首一族か）の私的な倉庫群と見ておきたい。

なお，発掘調査は現在も継続しており，今後新たな知見が得られることに期待したい。



SB0860・SB08128・SB08129 完掘（東から）

SB08125・SB08126 完掘（東から）

図 3　磐城山遺跡の遺構配置図（S=1/600）

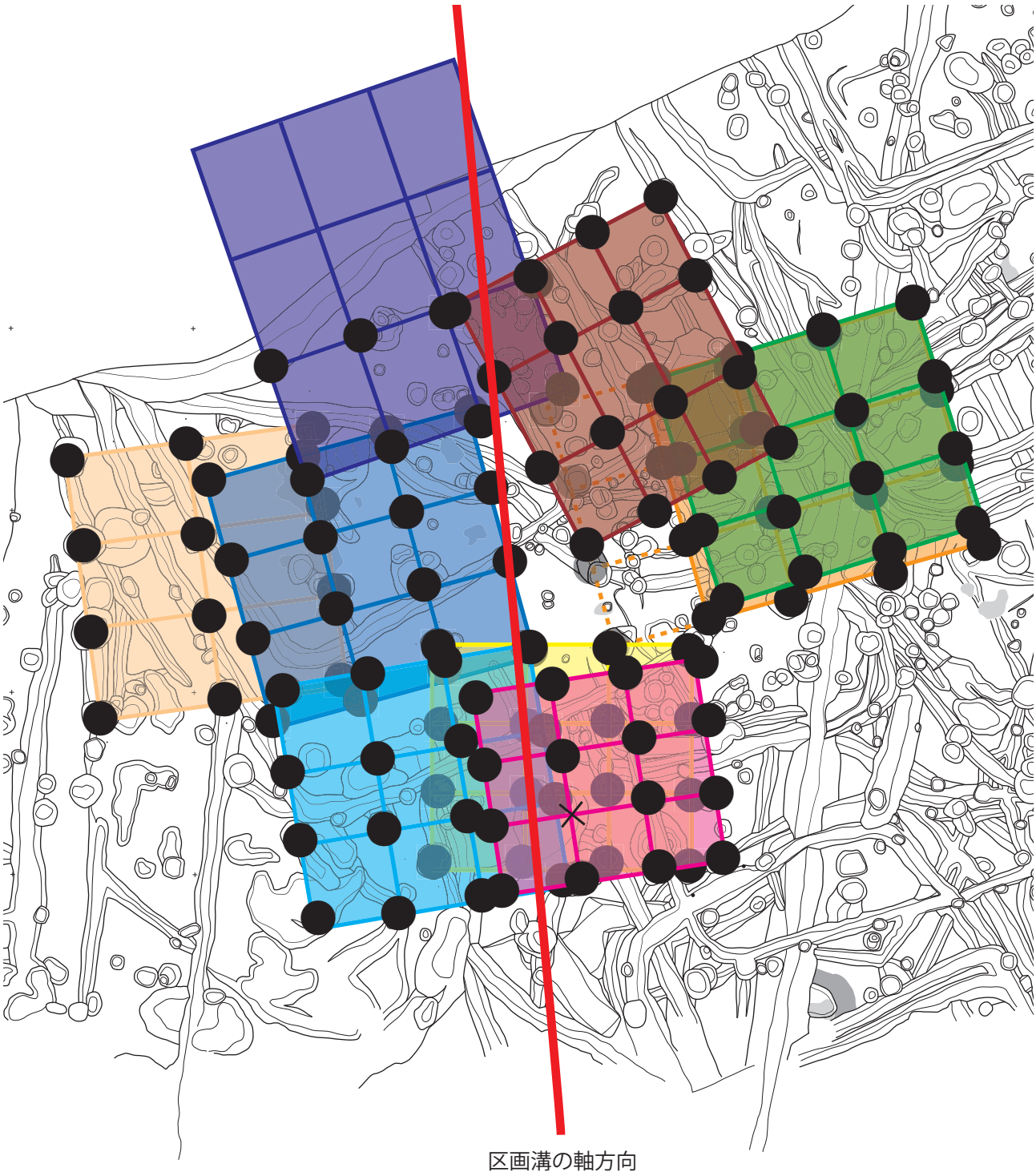


図 4　掘立柱建物の模式図（S=1/100）